

P-9 小細胞癌の部分像を伴う肺腺癌の2例

澁川キリスト教病院外科¹，同 呼吸器内科²
○加地政秀¹，紙森隆雄²，藤川晃成²

切除標本で初めて確認された，腺癌の一部に小細胞癌の成分を認めた症例につき病理学的に検討した。

(症例1) 66歳，女性。気管支喘息で加療中，胸部X線写真で異常影を指摘，気管支鏡下生検で低分化腺癌と診断された(左S2，径2cm)。自覚症状なし。C.I.=10本/日×15年。血清CEA，NSE，Pro-GRPは正常範囲内。本人一旦手術を拒否され，supportive careを行っていたが，約1年後も画像上の進行を認めないため手術(左上葉切除+R2b)を行った。術後病理診断は，低分化腺癌の同一病巣内に小細胞癌が一部混在していた。p-t₁n₂M₀，腺癌成分のみがリンパ節転移を来していた。術後2年，担癌生存中(頸椎転移)。

(症例2) 69歳，男性。はじめて健診を受け，胸部X線写真上右肺腫瘍影を指摘され精査入院となった(右S2，径2cm)。自覚症状なし。C.I.=40本/日×40年。血清CEA，NSE，SCCは正常範囲内。気管支鏡下生検で確定し得ず，肺癌を強く疑い開胸生検，術中迅速病理診断で腺癌の一部に僅かに小細胞癌を認め，右上葉切除+R2a施行した。永久標本では低分化腺癌で所々に小細胞癌を認め，一部では小細胞癌のnestの中で腺癌に置き変わりつつあるような像も見られた。腺癌成分が浸潤性増生していたが，病期はp-t₁n₀M₀で，術後5か月を経過して生存中である。

これら2例を文献的考察を加え報告する。

P-11 Zollinger-Ellison 症候群疑い症例に みられた気管支カルチノイドの一例

-プロトンポンプ阻害剤長期服用中-

長崎市立市民病院内科¹，外科²，病理³，
長崎大学第1外科⁴，長崎大学第2内科⁵

○神田哲郎¹，中野令伊司¹，高谷 洋¹，道津安正¹，
石崎 驍¹，小原則博²，河合紀生子³，綾部公毅⁴，
河野 茂⁵

症例は61歳の男性。主訴は労作時呼吸困難。5年以上前からZollinger-Ellison症候群(Z-E症候群)疑いでプロトンポンプ阻害剤(PPI)の投与をうけていた。今回，検診で胸部異常影指摘され当院入院となる。入院時胸部X線にて左上肺の無気肺がみられ，気管支鏡では左上幹を閉塞する腫瘍を認めた。生検では確定得られず平成10年2月9日左上葉切除が行われ，カルチノイド腫瘍の診断が得られた。術後腹痛，嘔吐，下痢などの腹部症状出現したがPPIの再開で軽快した。

PPI長期投与でのラットにおける胃カルチノイド発生は知られているが気管支カルチノイドの報告はない。本例はZ-E症候群が基礎疾患にあるもののPPI長期投与もその発生要因の可能性あり文献的考察も含めて報告する。

P-10 中枢型及び末梢型カルチノイド6症例の検討

(財)慈山会医学研究所付属坪井病院
○成田久仁夫，岩波 洋，日吉晴久，立花正徳，
左近司光明，長谷川浩一，坪井栄孝

【目的】低悪性度肺癌で比較的稀とされるカルチノイドの手術を6症例経験した。腫瘍の発生部位，臨床病期において適正な手術がなされたかを検討した。

【対象】1977年7月より99年4月末までの23年間に，当施設で手術を施行した原発性肺癌611症例中，カルチノイドと診断された6症例を対象とした。

【症例】男性4例，女性2例。年齢は48歳から72歳(平均56.8歳)で，中枢型，末梢型共に3例の計6症例。術後病理病期はStage I A: 1例，I B: 4例，II A: 1例であり，末梢型で定型例の1例にリンパ節転移を認めた。術式は肺葉切除術: 5例(うち sleeve lobectomy 1例)，肺部分切除術: 1例。予後は，肺葉切除術を施行した末梢型のStage I B症例を，同側上葉の扁平上皮癌で2年後に失い，同じく末梢型でStage II A症例に直腸癌を発症し，Miles 術後，初回手術と対側の舌区に，腺癌と直腸癌の肺転移を発症したため舌区切除を施行した。他の4症例を含む全例にカルチノイドの再発・転移はなく，5症例が生存中である。

【結語】定型例のカルチノイドは低悪性度であるため，中枢気管支発生の際には Sleeve 切除などを行い，末梢小型の症例には区域切除を行うなどの縮小手術が妥当と思われるが，定型例でも時にリンパ節転移を伴うことがあり，術前及び術中に十分な検索を要する。

P-12

肺神経内分泌腫瘍10例における病理組織学的検討
東邦大学医学部大森病院病理¹，同 胸部外科²，同
第2内科³，神奈川県立ガンセンター⁴
○田宮 幸¹，辻本志朗¹，高木啓吾²，沈 在俊³，清水
邦彦³，密田亜希⁴

肺神経内分泌腫瘍の組織発生については気管支・肺上皮のstem cell由来であるとされているが，いまだ解明されていない。我々は1994年1月から1999年5月までに当院で切除された肺癌のうち，神経内分泌腫瘍(Carcinoidを除く)の形態を示した10例(男性7例，女性3例，平均年齢67.9才)を対象とし，腫瘍細胞の大きさが成熟リンパ球の4倍以上を大細胞型，それ以下を小細胞型に分類し，病理組織学的に検討した。

大細胞型は4例で，腫瘍細胞はN/C比が低く，核は顆粒状で核小体が目立つものも見られた。一方，小細胞型は6例であり，N/C比が高く核はクロマチンに富んでいた。大細胞型のうち1例で腫瘍の辺縁部に腺腔形成を認めた。免疫染色では小細胞型より大細胞型においてCK，EMA，CEAの陽性率が高かった。また，MIB-1は10例全例で強陽性，bcl-2は7例で陽性，p53は6例で陽性を示した。以上より，大細胞型はTravisらの分類のLarge cell neuroendocrine carcinoma(LCN-EC)に相当するものと思われ，腺管構造の混在や免疫染色の結果からこれらの腫瘍細胞は神経内分泌系の性格だけでなく上皮系の性格も有すると考えられ，これらの腫瘍の発生や分化に関連する所見であると思われる。